

H22健全で豊かな森林づくりプロジェクト フォローアップ委員会 フォローアップシート

◆達成度に関するアドバイス

・ほぼ全ての項目で実績が計画値を下回っています。原因究明を徹底するとともに、速やかな改善行動を期待します。

◆成果に関するアドバイス

・長伐期施業を志向するのであれば、胸高直径に捕らわれず将来生長が期待できる樹冠長3割以上の立木を残す必要があります。相対幹距を参考にするなどして選木技術の向上に務めて下さい。
・観察の結果、表層土壌が非常に薄く土壌生成に長時間を要する地域と判断されます。まずはこれ以上の表層土流出を抑制するため、強度間伐の実施により下層植生を豊かにして下さい。
・A層になるべく多くの落葉落枝が供給されるような強度の間伐を行うことにより、適度な土壌の厚みや湿度が確保され、またそうすることで微生物による分解が助長され、表層土壌は一層豊かになります。今後の森林整備では、こうした自然の摂理を理解して伐採率の決定に務めて下さい。

◆効率性に関するアドバイス

・高密度路網の整備が困難な土質の地域であっても最低限の路網は必要です。タワーヤーダなどの架線系作業システムも駆使しつつ、環境保全と経済性追求の調和に取り組んで下さい。
・架線集材を面的に魚骨状(延長200m、幅60m)で集材すれば、それだけで120m³/haは出材可能と思慮されます。さらに周辺森林も一体的に整備すれば、200m³/haの出材も期待できます。皆伐を実施する際には、経済性のみならず、様々な観点から施業方針を立案・採用して下さい。

◆妥当性に関するアドバイス

・投資コストとの兼ね合いにはなりますが、個人の財産であり税金が投入されている以上、今後の生長が期待できない林分であっても、単純に皆伐によって森林をリセットするという発想は好ましくありません。
・施業跡地には、天然更新したスギやヒノキの稚樹が多数確認されましたが、施業方針では皆伐を選択しており、森林現況と施業方針の整合性が不十分なため森林づくりのビジョンが不明確です。
・施業としての皆伐は否定しませんが、水源林の保全を標榜している以上、実施する場合には、何かしらの問題が発生したときに備えて皆伐施業が下流域に与える影響をチェックしておき、いつでも十分な説明対応が出来るよう準備しておいて下さい。
・下層植生の存在が森林の保水機能を高めます。通常、降水では80%が土壌内に浸透し、残りの20%は蒸散作用などによって流出してしまうため、帯状皆伐は水源かん養とは相反する面があり、災害発生の要因にもなり得ることを理解して下さい。
・補助制度の使用を前提として施業方針を採用するのではなく、施業内容が現地に適しているかどうかを十分に検討したうえで方針を決定して下さい。

◆発展性に関するアドバイス

・地域の重要な水源林として位置づけられる場所において、森林整備による水源保全を目指すのであれば、これまで以上に木材生産に注視しすぎることの無い森林づくりを追求して下さい。
・施業方針を決定する際には、木材生産に捕らわれることなく森林の現状をじっくりと観察し、そこから得られた教訓を踏まえて森林の持つ諸機能が発揮されるような取り組みを心がけて下さい。
・施業後1～2年経過していることから、浄水場より下流域にある河川の集水地点では間伐実施の影響が把握できると思います。施業実施前後の状況をチェックしデータを比較・蓄積して、いつでも説明できるよう、是非とも森林の現状をじっくりと観察する姿勢を身につけて下さい。

◆総括に関するアドバイス

・目先の利益だけに拘ると、何れ森林所有者に見放されてしまいます。獲得した地域の信頼感をさらに高めてもらうため、自らの森林づくりに関する理念獲得、森林所有者に対する複数選択肢の提示能力獲得等に向け、一層勉強に励んで下さい。

◆フォローアップ委員会の開催状況

平成22年12月20日

日時：平成22年10月28日(木)
場所：恵那市串原町中沢地内
参加委員：三島 喜八郎 岐阜県森林組合連合会 代表理事副会長
篠田 成郎 岐阜大学総合情報メディアセンター 教授
湯浅 勲 日吉町森林組合理事兼参事
対象：恵南森林組合



プロジェクトの概要説明



伐跡に多数確認されたスギ・ヒノキ等の天然更新稚樹



配慮を欠く架線集材によって発生した残存木の裂傷



選木・間伐の考え方に関する指導



高齢級林分における帯状皆伐



長伐期施業に不相当と指摘された残存木（樹冠長不足）



表層土壌の観察結果から伐採率の決定を指導



路網と作業システム（タワーヤーダー）

H22健全で豊かな森林づくりプロジェクト フォローアップ委員会

委員長 三島 喜八郎